

「地域メンバーとしての MICE 施設の取り組み」 後編: 大型公共MICE施設 (名古屋国際会議場ほか)

MICE 施設は「場」の提供を通じて集客・交流・情報発信を促進するとともに、地域を象徴するランドマークとして地域全体の価値を高めます。先月号の前編に引き続き「地域メンバーとしてのMICE 施設の取り組み」と題して、後編では名古屋国際会議場の事例を通じて、大型公共MICE 施設を通じた(株)コングレの価値創造の取り組みをご紹介します。



名古屋国際会議場

愛知県はものづくりの集積地であり、インダストリアルデザインの本拠地でもあることから、名古屋市では1989年に「世界デザイン博覧会」が開催されました。そのテーマ館として整備された白鳥センチュリープラザが現在の名古屋国際会議場です。1990年の開館以来、「米州開発銀行 (IDB) 名古屋総会」(1991年)、第24回と第30回の「日本医学会総会」(1995・2019年)、「生物多様性条約第10回締約国会議 (COP10)」(2010年)など、都市のブランドを向上させるような数多くの会議を受け入れてきました。

指定管理者制度の導入に伴い、2010年からコングレが、2014年からは公益財団法人名古屋コンベンションビューローも加わって同会議場の施設運営を担当しています。これはPCOが中心となって大都市の大型MICE施設を管理運営する、日本ではじめての事例となりました。会議運営のプロがMICE施設を運営することによって、単なる貸館や付帯サービスの提供にとどまらない、地域の新たな価値創造が進んでいる様子をご紹介します。

会議のプロによる先回り提案と自主事業

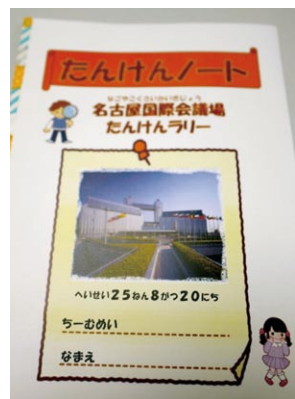
名古屋国際会議場の丹羽礼子マネージャーは、もともとコングレ中部支社で10年間にわたり会議ディレクター業務を担当していました。つまり、会議運営のプロフェッショナルなので、予約受付や当日手配にあたっては、会議主催者の「勘どころ」を押さえた先回り提案とスムーズなサービスを提供することができます。



丹羽礼子さん

施設の通常業務である貸館・付帯サービス業務に余裕が生まれると、次は自主事業に取り組むようになりました。それも、芸能プロダクションの企画をそのまま持つてくるような形での集客イベントではなく、施設の設置目的である「国際交流の推進および産業、学術、文化の向上」に即した、地域の価値向上を目指した自主事業です。

事業を企画するにあたり、丹羽さんにはひとつの問題意識がありました。「会議場とは何をやっているところなのか、ふだん会議場に来る機会のない人たちにこそ知ってもらいたい。」そこで企画したのが、子供向けイベント「名古屋国際会議場たんけんラリー」です。約60名の小学生を招いて、5～6名のグループごとに会議場を探検するクイズスタンプラリーを開催しました。中部地区屈指のコンサート会場でもあるセンチュリーホールの客席は3,000席以上。秘密基地のような舞台裏で舞台設備を操作したり、セリに乗ったり、普段体験できない会議場のバックヤードに子供たちは大興奮。夏休みの貴重な経験となりました。子供たちが思い出に持ち帰れるものとして職員が手づくりで作成した「たんけんノート」は、今は丹羽さん自身の宝物にもなっています。



自主事業と価値創造

そもそも名古屋国際会議場が自主事業を始めるきっかけは、2011年の東日本大震災でした。被災地に何か貢献できないかという思いから、館長の中谷務さんがチャリティコンサートを発案したのです。この試みには多くのアーティストや市民が賛同し、結果的にフルオーケストラと多数の豪華アーティスト、3,000名以上の市民が集まり、被災地に義援金を送ることができました。

以来、さまざまな自主事業を開催するようになった名古屋国際会議場ですが、企画にあたっては(1)名古屋市の施策、(2)熱田・周辺地域の歴史、(3)施設の特徴という3つの要素を踏まえたうえで、デザイン、環境、ポップカルチャー、歴史(熱田)、医療・健康、吹奏楽という6つの軸を意識し、同会議場ならではの事業を定期的実施しています。

この結果、名古屋国際会議場の事業には周辺住民を中心とした1,500名以上の「固定ファン」がつくようになり、集客のために新聞広告などを出す必要がなくなりました。また、セ

ンチュリーホールの稼働率は93.2%と、極めて高い成績を収めています。

単なるハコ貸しではなく、会議のプロが創意工夫することによって施設や地域に新しい価値をもたらす、それが名古屋国際会議場のMICE施設運用のDNAと言えるかもしれません。それでは、もうすこし具体事例を見ていきましょう。

次世代人材育成

田中聖実さんは、主に学生向けの自主事業を担当しています。隣接する名古屋学院大学や愛知県立大学外国語学部を対象として、MICEに関する講義や同時通訳体験の提供、そして学生による「おもてなし」プランの提案・発表会などを企画し、MICEへの関心を高めています。中でも、実際の国際会議「国際影響評価学会IAIA16」において、学生主体の「おもてなしイベント」が実現したことは、大きな成果でした。また、経済学部との連携による大型会議の経済波及効果調査や、さらにユニークなところでは、名古屋国際会議場のウェブサイト分析という企画もあります。学生からのダメ出し(!)を受けることにより、名古屋国際会議場では、幅広い世代に受け入れられるウェブサイトの構築をめざしています。



田中聖実さん

大胆な館内サイン類の見直し

名古屋国際会議場は1号館から4号館まで4つの建物で構成されているため、移動するうちに所在地がわからなくなり、迷う利用者もみられます。もともと会議場の舞台技術スタッフとして勤務していた山本俊太郎さんは、コングレが指定管理を担当してから営業部に起用されました。

大学で環境社会計画を学んでいた山本さんは、名古屋工業大学との連携による館内サインプランの見直しと、観光案内コーナーのリノベーションを企画提案して実施しました。かつては貯木場であった名古屋国際会議場の周辺エリアの歴史や文化も踏まえて検討されたリノベーションは、日本サインデザイン協会の「SDA学生賞」(2016年度)を受賞。同年の国



瑤子女王殿下と山本俊太郎さん

際ユニヴァーサル会議では、瑤子女王殿下に取り組み内容をご説明する機会に恵まれました。

吹奏楽の聖地が名古屋へ

「全日本吹奏楽コンクール」は、全日本吹奏楽連盟と朝日新聞社が主催する日本最大規模の大会です。その開催施設の専門館(東京・杉並区)は「吹奏楽の甲子園」と言われる存在でしたが、2012年の耐震調査で使用できなくなってしまいました。このときセンチュリーホールの音響性能と待機・練習用の複数のホール、十分なバス駐車スペースを訴求ポイントとして、中谷館長をはじめとするスタッフの熱心な誘致活動により、名古屋国際会議場が以降の開催地に選ばれました。つまり、吹奏楽の聖地が東京から名古屋に移ったのです。

高校の吹奏楽部をテーマにしたテレビアニメ「響け! ユーフォニアム」では、名古屋国際会議場がリアルに描かれています。控室やバックステージツアーのほか、アニメに出てくる会議場の隅々まで紹介するイベントには、聖地巡礼よろしく日本全国からファンが殺到しました。開館30周年となる2020年には「1万人の吹奏楽コンサート」を予定しているほか、障がい者への支援の充実や乳幼児も入場OKのクラシックコンサートなど、吹奏楽を軸としたさまざまな自主事業の企画・実施により、名古屋国際会議場の指定管理者として、地域の価値を創造し、向上させています。

大規模MICEのエリア開催

今年4月末に名古屋で開催された日本最大規模のコンベンション「第30回日本医学会総会2019中部」は、学術講演会を名古屋国際会議場、市民展示をポートメッセなごや、市民公開講座を愛知県芸術文化センターで開催しました。いずれもコングレが指定管理および人材サービスを担当する施設だったこともあり、複数施設にまたがる大規模なMICE開催においても、社内の綿密な情報共有により、効率的でスムーズな運営を実現することができました。

5月号ではパレ・デ・コングレ国際会議場インターン報告を通じて、パリの官民セクター ViparisによるMICE施設(10施設)の統合運営とデスティネーションの競争力向上についてご紹介しましたが、日本でも地域戦略とMICEおよびMICE施設の関係はより密になってきているのかもしれませんが、MICEによる地域戦略にはさまざまな方法論がありますが、今回は民営MICE施設(大阪)と大型公共MICE施設(名古屋)の事例をご紹介させていただきました。



西本 恵子 Keiko Nishimoto, CMP

(一社)MICE総研(コングレグループ) 上席研究員。京都大学経営管理大学院博士後期課程(D3)で「国際会議・MICEを通じた開催都市の価値創造モデル」について研究している。直感のままに生きる関西人(ふたご座・O型)なので名古屋人の理屈っぽさが苦手だが、なぜか名古屋市の観光MICE戦略に携わることになり、メ〜テレにまで出演したことがある。